

# 小中一貫校 南アルプス市立白根飯野小学校令和4年度前期学校関係者評価書

## 【学校関係者評価委員会】

- 1 実施日 令和4年9月9日
- 2 会場 白根飯野小学校図書室
- 3 参加者

### (1) 学校関係者評価委員

NO	氏名	役職
1	市川 和郎	元校長・学校評議員
2	飯野 久	学校評議員・南アルプス市議会議員
3	飯田 哲夫	元校長・学校評議員
4	佐藤 知佳	学校評議員・PTA 会長
5	川手 義和	飯野地区自治会長
6	飯田 照男	飯丘地区自治会長

### (2) 学校職員 (3名)

NO	氏名	役職	備考
1	河住 悦久	校長	本校在籍1年目
2	井上 武人	教頭	本校在籍2年目/事務局
3	八巻 一貴	教務主任	本校在籍1年目

## 4 学校から提案した内容

- (1) 教職員による前期自己評価アンケートの状況
- (2) 学校生活に関する前期児童アンケートの状況
- (3) 学校生活に関する保護者アンケートの状況
- (4) 白根飯野小学校前期自己評価書 (アンケートの分析及び改善方策について)

## 5 学校関係者評価委員会報告概要

本校の学校評価は、学校教育目標の実現 (学校経営方針の実現に向けた本年度の努力点) のための取組状況を、教職員による自己評価に加え、保護者と児童によるアンケート調査結果を活用する中で、それぞれの立場を踏まえるとともに、これらに関わる設問に寄せられた意見や、日常的に行っている児童観察も加味して分析し考えている。

なお、今回の調査は1学期の取組が根拠となる。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の蔓延防止対策のため、様々な活動が削減されてきたことを考慮し、保護者アンケートの『9 学校は、授業参観・行事等学校開放に努め、保護者と連携し、その意見に耳を傾けてい

る。』『14 P T A活動に進んで参加している』『15 お子さんを地域の行事に参加させている』については、質問項目から除外した。

## [1] 評価基準

全体傾向を把握するため、A B評価を肯定的評価とし、それらの合計が、80%を超えている場合は『満足できる状況』と判断した。また、C D評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は『改善の余地がある状況』と判断した。

(A: そう思う B: だいたい思う C: あまり思わない D: そう思わない E: わからない)

## [2] 各項目の分析

### (1) 確かな学力について

本校では校内研究のテーマ「対話し、学び、わかちある子どもの育成 ～安心して学び、伝え合う活動を通して～」を軸に、児童間の関わりを基盤とし、学習プロセスや言語活動を重視した授業展開によって、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、学習指導要領で示される資質・能力の育成に取り組んでいる。

自己評価の結果を見ると「児童が友達の考えや感想に耳を傾け、多様な考えを大切にしたい対話的な深い学習を創造することができたか」(79%)、また「ペア学習、グループ学習を有効的に取り入れ、伝え、聞くなど言語活動を充実させることができたか」(58%)の2項目については他の項目と比較し、低い平均値となった。指導にあたって新型コロナウイルス感染症を蔓延させないための手立てとして、児童間で対話する場面に配慮しなければならない点が大きな要因であると考えられる。今後、これまでの対コロナで培ってきた様々なノウハウを活用しつつ、学習課題の提示や振り返りといった学習プロセスを確認したり、言語活動の工夫に取り組んだりしていく必要がある。また個別最適な学びの実践を目指し、1人1台端末の活用を図った授業改善を行っているが、今後も一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた個別学習や、ICT 活用により、それぞれの考えや意見に即時に触れられる共同学習を実現できるよう、さらに取組を進めていくことが必要である。

### (2) 豊かな心について

職員が成果を高く評価したものは「①すべての児童に居場所がある、学校・学年・学級づくりに、それぞれの立場で努めることができたか。」(90%)、「②基本的人権と個人の尊厳を尊重し、いじめや不登校への対応や防止に取り組むことができたか。」(95%)「⑤読書の苦手な子どもにも本を読む時間を確保するなど、すべての子に読書習慣を育むことができたか。」(95%)である。読書週間の取組や多読者の発表による読書意欲を喚起する取組、小笠原流礼法の授業による人を大切にするための所作を学ぶ機会の確保も大きな要因であると考えられる。また3年ぶりに実施した芸術鑑賞会も子供たちの心を育くむよいきっかけとなっているのではないだろうか。保護者の評価においても「②子どもは、仲間と協力し、行事や活動に粘り強く取り組んでいる。」(95%)、「⑥子どもは、人の心を思いやり、豊かな心を育てている。」(95%)といずれも高い評価を得た。

また保護者アンケートの「⑤子どもは、学校・学年・学級で理解され、心の居場所を持つ

ている。」(93%),「⑥子どもは、人の心を思いやり、豊かな心を育てている。」(95%)の結果からもいじめ防止へのきめ細かな対応により子どもたちが自分の存在価値を自覚し、学校生活を送っていることに対して評価されていることが伺える。

一方、課題となる点が、「上学年の子どもの活動から、下学年の子どもが自らと学べる縦割り活動の確立に向け、適切な指導助言ができたか。」(58%)である。コロナ禍により異学年での交流や活動が制限されていたため、上学年の子どもがそうした力をつけてくる機会がなかったことも大きな原因と考えられるが、2学期に行われる様々な行事への取組等を通して、自己有用感や自己肯定感を高めていけるような機会を設けることが必要である。

### (3) 健やかな体について

自己評価において、「1 運動の苦手な子どもも自己の進歩や達成感を味わわせ、運動習慣を育むことができたか。」「2 日常的な運動・食事・睡眠と健康について理解を深め、健康な生活習慣を育むことができたか。」の両項目とも100%の肯定的な評価となった。また保護者の評価においても、

「10 子どもは安全を意識して登下校している。」(92%),「12 御家庭では、早寝・早起き・朝ごはんに取り組んでいる。」(97%)の項目についても肯定的な評価が高い結果となっている。しかしながら登下校については、道路の歩き方等についての課題をあげてくださった保護者もいる。これまでも同様な意見を寄せていただいていることがあり、改善が進んでいない状況がある。

今後も日常的な運動や食事、睡眠への理解や取組、また休み時間等の外遊びの励行、登下校中の児

童の安全意識を高める指導など、今後も家庭や地域と連携を図りながら、取組を継続していくことが

大切である。

### (4) グローバルに活躍する人材について

3項目とも高い肯定的な評価が高い結果である。今年度より外国語専科が配置され、外国語の授業において表現しあう活動を工夫して取り入れたり、主体的・対話的で深い学びを充実させたりする取組を行ってきている。今後も、外国語の知識や理解のみならず、学ぶことを通して自己や他者の良さやに気づき、社会とかかわる意欲や態度の育成を図ることが大切である。

また児童のキャリア発達を促すためのキャリアパスポートの活用を通じた取組も行っている。記録する回数は限られているが、日常的な活動も含め、自己肯定感や自己有用感を向上させる取組を継続して行っていきたい。

### (5) 特別支援教育の推進について

自己評価においては、どの項目とも肯定評価が高い結果となっている。特別支援教育コーディネーターを中心とし、校内支援委員会やケース会議を開催し、情報共有と指導・支援内容の相談・確認を行っている。個々のニーズに応じた指導や支援ができるよう、積極的に関

係機関とも連携を図りながら対応してきた結果であると考えられる。特別支援学級だけでなく、通常学級においても課題を抱え、それぞれの特性に応じた支援が必要となる児童が増えている状況ではある。職員の支援体制にも限界はあるが、今後も全職員で情報を共有しながら、個に応じた支援・指導を行っていかなければならない。

#### (6) 保護者・地域との連携

自己評価の「①適切な情報発信等を通して、保護者・地域との共通理解を図るとともに、その力を活用し、ともに支えあう地域の学校づくりに努めることができたか。」(83%)、また保護者アンケート「⑦学校は、情報発信（連絡帳、おたより、ホームページ等）として、子どもの教育活動を伝えている。」(93%)の結果より、学校と保護者との情報共有や連携はある程度とれていると考えられる。今後も継続して、適切な情報を発信することで、保護者や地域との連携を深めていきたい。

P T A活動に関する評価では、自己評価の「P T A活動等を通して、保護者との協力関係を築くように努めることができたか。」(74%)の項目の評価が低いのは、新型コロナウイルス感染症の影響により、保護者や地域住民、学校関係者の支援を受けづらく、充実した教育活動の機会が失われてしまっていることが大きな原因であると考えられる。

まだまだ制限も多い中であるが、保護者・地域社会と連携・協働しながら、社会に開かれた教育課程の充実を図っていきたい。

#### (7) 「小中一貫への取組」について

本校は今年度より「小中一貫校南アルプス市立白根飯野小学校」としてのスタートを切った。昨年度来、①小中の9年間で目指す児童生徒像の設定、②小中一貫教育推進協議会の設置、③研究組織の立ち上げ、④全職員での研究開始、⑤教育課程概要版（白根巨摩中学区小中一貫教育スタンダード）の作成等に係る準備を進めてきた。

自己評価においては「目指す児童生徒像を理解」し、「取組や教育課程を意識した取組」を行ったかについての評価が59%と低い評価となっている。昨年度取り組んできたことの情報共有する機会が少なかったことも大きな原因と考えられるが、これまでの取組をブラッシュアップすることで、さらに小中一貫教育を推進していきたい。また全職員による共通理解だけでなく、地域住民や保護者に説明し、理解と協力を求める活動も大事になってくる。

#### [3] 学校関係者評価委員の助言等

○「学校が楽しい」と回答している児童は学年によって差がみられる。5、6年の肯定的回答の割合が低いのは、子どもたちが大人になってきたためであるとか、アンケート自体をシビアに捉えているのか、様々な要因が考えられる。自我が目覚めてきていると捉えることができるのではないか。

○思春期になると、自分を思い思い切り出すのを少し躊躇するとか、ちょっと苦手だなんて思いを感じているような子どもが見受けられるようになってくる。自分を厳しく見たくない

る時期でもあるので、そういった部分では実際より厳しい評価をしていると感じる。

○コロナにより、行事も制限される中で、縦割りで様々な活動を通して経験する機会が少なくなったことで、子供たちの関わりが少なくなりました。感染対策をしながらペア学習を取り入れ意見交換ができたりできるようになるとよい。運動会の中で、縦割り種目や全校競技なんかも今年挑戦してやってみようということになっているようだが、6年生の活躍の場をたくさん与えて下級生と触れ合う縦の関係を大事にする場を作っていくことが大切である。

○地域住民は、子供たちの表情から学校の様子を知ることができる。最近ではコロナの影響が相当あるな、と感じる。以前に比べると表情は明るくなってきているが、子どもたちにコロナの影響によるストレスがかかってことを感じる。教師にとっても本来の教育活動以外の対応は相当なものがあると思う。働き方改革とういことも言われているが、教員の精神的、物理的な負担増は否めない。児童の様子も含め、学校の置かれた状況を地域に発信していくことが大切である。

○子供たちに目標をつくらせることが大切。学習面ばかりでなく、様々な価値観を持たせながら子どもたちが認め合える環境づくりをしてほしい。